

## 草戸千軒発掘秘話③ グッドタイミングで川の水位が下がった

草戸千軒町遺跡の調査では、「この時で本当によかった」ということもあります。芦田川の中州となっていたため、常に「水」の影響を受けていましたが、特に悩まされたのが、昭和59年(1984)の第33次調査区と、その南側に接する場所にあり、昭和61～62年に実施した第36次調査区です。その理由は、この2つの調査区では、芦田川との間に砂が厚く堆積していたことによります。

当時、河口堰<sup>かこうぜき</sup>の完成により、遺跡周囲の芦田川の水位は海拔2mほどになっていました。一方、調査区の遺構面は海拔1.7mほどです。このため、調査区の表土を除去して遺構面を出した時点から、川の水が砂層を通過してくるのです。エンジン・ポンプを動かしながら調査を進めるのですが、休日明けの月曜日の朝には調査区がプールと化していました。

さらに、この二つの調査区では、規模が大きく深く掘り込まれた池や溝などが多く造られていました。これらの遺構は、掘り下げを進めていくと、底部から水が湧いてきます。いわば、地面の横と下から水に襲われるかたちになったのです。

こうした中で、二つの調査区でともに最後に残ったのが、後にSG3060と名づけた池状の遺構です。第33次調査区では長さ25m、幅15mほどで、第36次調査区へ続き、長さは75mとなります。第33次調査区では、残念ながら湧水<sup>わきみず</sup>を制御することができない中での調査となりました。第36次調査区でも苦闘<sup>きうとう</sup>は避けられないものと覚悟を固めざるをえませんでした。

しかし、昭和62年に入ると、下流の橋脚工事<sup>きょうきゃく</sup>により、数か月の期間限定で芦田川の水位が下げられました。このため、地面の横と下からの湧水が極端に減少し、水の悩みから一挙に解放されました。そして、土層の堆積状況や範囲を確実に捉えた上での調査が可能となったのです。

その後の成果とあわせて、SG3060は、町の外縁部に造られたもので、水路網の一環をなし、運河としての役割を果たしたことが推定されるようになりました。いわば、港町・草戸千軒の機能を象徴する施設といえるでしょう。このことが明らかになったのも、川の水位が下げられたことが大きく関わっています。期間限定という条件の中、SG3060の調査が「この時で本当によかった」と実感することになりました。そして、「もし、水位が下がらなかつたら、どうなっていたらどうか」と、調査を担当したS調査員は、自問自答を繰り返していました。

(主任学芸員 下津間康夫)



第33次調査区 月曜の朝の状況 昭和59年4月



運河と推定されるSG3060(第36次調査区) 昭和62年2月